

題目 『児童自立支援施設における家庭的処遇のあり方についての一考察
—留岡幸助の思想を中心に—』

指導教官 山口健二
発表者 尾本秀嗣

I 題目設定の理由

児童自立支援施設の前身である教護院ができた戦争直後に多く見られた、孤児などの親の実質的不在による児童の養護ニーズは、昨今の時代は少なくなってきた。しかし一方で父母の離婚、放任・怠惰などによって、親が存在しながら養護ニーズが存在するケースが増加し、家庭に居場所を見出せない子どもたちが、児童相談所などから児童養護施設、あるいは児童自立支援施設へ送致されて生活を送っている。私は、二年前から岡山市にある、岡山県立成徳学校(少年の丘)へ週に一回、学習支援員として通うようになり、児童自立支援施設というものに興味を抱き始めるようになった。なかでも、施設の中で入所児童の生活の中心である寮舎の運営方法についてもっと探求してみたいという思いが強くなった。岡山県立成徳学校では、計5つの寮をそれぞれ寮長、寮母の夫婦が面倒をみている(詳細は後述するが、このような寮の運営形式を「夫婦小舎制」という)。そして、あたかも一つの寮が一家族であるかのような環境の中で入所児童は日々の生活を過ごし、心身ともに大きく成長していつている。このような擬似的な家庭環境が児童の精神的な更生・教育に深くかかわっているのではないかと私は考え、上記のような題目を設定した。

II 論文構成

はじめに

第1章 児童自立支援施設における寮の役割

第1節 児童自立支援施設における寮生活

第2節 実際の寮生活の流れとそれに関わる施設職員の重要性

第2章 留岡幸助の感化理念とその実践

第1節 留岡幸助の感化理念について

第2節 留岡幸助の実践～2つの家庭学校での取り組み～

第3章 児童自立支援施設における家庭的処遇の実践とその限界

第1節 家庭的処遇の理念から誕生した夫婦小舎制

第2節 寮舎形態の変遷の状況と新たな問題点

第4章 家庭的処遇の有意性を生み出す作業指導の実践～岡山県立成徳学校の陶芸指導を例に～

終わりに

III 論文内容

<第1章>児童自立支援施設における寮の役割

本章では、児童自立支援施設の中で入所児童の生活の基盤ともいえ、本題目中にある家庭的処遇のあり方にも関係性の深い寮について、その果たす役割にはどのようなものがあるのか、ということについて述べた。また、入所児童と深い関わりがあり、なおかつ児童への重要な役割を担う児童自立支援施設の施設職員の指導などに触れ、考察した。

<第2章>留岡幸助の感化理念とその実践

本章では、日本の感化教育の先駆者であり、児童自立支援施設における家庭的処遇の原点とも言うべき「家庭学校」を創設した留岡幸助について、その感化理念の特徴や、彼が創設した2つの「家庭学校」で実践された取り組みについて述べた。

第1節では、留岡幸助の生い立ちを簡単に紹介し、彼が感化理念を抱ききっかけとなったキリスト教との出会いや、彼の感化理念の確立に大きな影響を及ぼした思想との関わりについて言及した。また、それらの思想から生まれた留岡幸助独自の感化理念である独立自営論(監獄学の研究で渡米

した際に学んだ、罪を犯した少年に対して、その罪に対応した罰を与えるのではなく、少年の心を更生させ、社会復帰できる人物に教育するという主義に、キリスト教の教誨の思想や、尊徳の報徳思想の要素を取り入れた考え方について述べ、彼の主著である『家庭学校』(留岡, 1900)の中で、彼が独立自営論において非行少年の精神的更生を行うためには彼らの境遇・環境の改善、特に家庭的環境を作り出すことを重要視している点に着目し、彼の感化理念の中で、非行少年への家庭的処遇が中心をなしていることについて言及した。

第2節では、第1節で述べた彼の感化理念に基づき、彼がその理念を実践するために創設した、東京巣鴨家庭学校と北海道家庭学校での取り組みについて、主たる活動内容の概要をまとめた。家庭学校では学校教育の側面と職業教育的側面があったが、ここでは主に職業教育的側面について、特に留岡幸助が重視した勤労・農作業といった労働教育について言及した。

<第3章>児童自立支援施設における家庭的処遇の実践とその限界

本章では、第2章で述べた留岡幸助の感化理念と実践を受け継ぎ、現在の児童自立支援施設で取り入れられてきた寮の指導・援助形態である、「夫婦小舎制」の確立を中心とした児童自立支援施設における家庭的処遇の実践と、その限界について述べた。

第1節では主に「夫婦小舎制」の確立と、寮長・寮母の適切なリーダーシップなど、「夫婦小舎制」を効果的な体制として運営していくために必要な機能性について述べた。

第2節では、施設職員の自由な時間の確保や入所児童の「わが寮意識」の芽生えなど、「夫婦小舎制」の抱える問題から、新たに「併立制」や「交替制」、また、寮舎の規模の観点から「中舎制」や「大舎制」というように、さまざまな形に変遷を続けてきた寮舎形態の動きについて考察した。また、近年、愛知県の児童自立支援施設で起きた事件を参考に、児童自立支援施設の抱える新たな問題点について考察した。

<第4章>家庭的処遇の有意性を生み出す作業指導の実践～岡山県立成徳学校の陶芸指導を例に～

本章では、児童自立支援施設ならではの指導形態であり、全国の児童自立支援施設でその土地の風土を生かした特色ある指導が行われている、作業指導について触れた。そして、作業指導からみえてくる家庭的処遇の有意性について、私が個人的にお世話になっている岡山県立成徳学校で、30年ほど前から取り組まれている陶芸指導の実践を例に述べた。

陶芸指導では、岡山県の伝統的な焼き物である備前焼を同じ寮の児童と協力して自ら製作し、自分の生活のなかで使用したり、保護者へプレゼントしたりすることで、ものを大切にする心や家庭的つながりを感じられることについて言及した。また、この陶芸指導において各寮が擬似的な家庭的環境下にあることが、児童の陶芸に取り組む姿勢や、自分以外の入所児童への思いやりにつながり、ひいては、自分の保護者や周囲の大人への不信感の払拭につながることも言及した。

IV 今後の課題

本論文では、主に児童自立支援施設の寮舎における家庭的処遇のあり方について考察してきた。そのなかで、児童自立支援施設における家庭的処遇が、児童の精神的な更生・成長に重要な意味をもつことを改めて実感した。しかし、変わりゆく社会のなかで、「家族」というものの役割も変容している。よって児童自立支援施設では、これからの時代の「家族」のあり方に対応できる、新しい時代の新しい家庭的処遇のあり方を探っていき続けることが今後の課題である。

V 主要参考文献

小林英義・小木曾宏 2004, 『児童自立支援施設の可能性』 ミネルヴァ書房

田澤薫 1999, 『留岡幸助の感化教育』 勁草書房

留岡幸助 1983, 「家庭学校」 高野義夫『日本児童問題文献集1』 日本図書センター

全国児童自立支援施設協議会 1999, 『児童自立支援施設運営ハンドブック』 三学出版